

＜本郷キャンパス＞
学校法人文京学園
文京学院大学経営学部・外国語学部・
保健医療技術学部／大学院／文京学院
大学生涯学習センター
〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1
☎大 03-3814-1661 生涯 03-5684-4816
文京学院大学文京幼稚園
〒113-0023 東京都文京区向丘 2-4-1
☎幼 03-3813-3771

＜ふじみ野キャンパス＞
文京学院大学人間学部・保健医療技術学部
／大学院／文京学院大学ふじみ野幼稚園
〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196
☎大 049-261-6488 幼 049-262-3806

＜駒込キャンパス＞
文京学院大学女子高等学校／文京学院
大学女子中学校
〒113-8667 東京都文京区本駒込 6-18-3
☎03-3946-5301



平成 30年(2018 年)
9 月 30 日
第 743 号
発行
学校法人文京学園
http://bgu.ac.jp

大学

本学×中京学院大学 「中山道ナイトウォーク」 大盛況

経営学部の長期フィールドワーク「AnimeJapan」学生実行委員会「中津川班」に所属する学生たちが、岐阜県中津川市域学連携活動支援補助金を受け、中津川の魅力発信のための動画制作に取り組んでいます。

同活動を行うにあたり、中津川班メンバーは、サラサドウダン（中津川市の花）をモチーフにした電飾「さらさどうだんライト」を用いた「中山道ナイトウォーク」を企画しました。これは、浴衣姿の人々が「さらさどうだんアクセサリー」を身につけたり、「さらさどうだんライト」を手にして夜の街道を歩くイベントです。

7 月には、現地訪問、実地調査を行い、本学の「五街道ウォーク」が縁で交流を深めてきた中京学院大学、中津川市役所等と打ち合わせを重ねました。

8 月 4 日には、中京学院大学と協同で、同市で開かれた六斎市において「さらさどうだんライト」制作のワークショップを実施。

9 月 1 日、両大学による中津川まんてんぼしプロジェクト「中山道ナイトウォーク」に、中津川市の青山節児市長、本学の島田昌和理事長も応援に駆けつけ、プロジェクト全体が活気づきました。夕方から販売した「さらさどうだんライト」は、大人気で完売御礼！

美しい灯りを手に、人々が浴衣姿で街をそぞろ歩く様子は、今後、同市の魅力を紹介する動画として配信予定。中津川班メンバー一同、この活動が同市の中心市街地活性化の一助となることを願っています。



「さらさどうだんライト」
温かな光を放つ



「さらさどうだんライト」を
持つ子どもたちと一緒



有意義な協議後に笑顔で記念撮影

9 月 21 日、駐日ウズベキスタン共和国特命全權大使 イチ・ファジロフ閣下が、使のガイラト・ガニエウ・アジゾフ・シロジェニ等書記官、通訳の池田やすこさんと共に本郷キャンパスに来校しました。

本学からは次の教員、学生が出席し、交流協議が行われました。

▼島田昌和理事長 ▼島田輝子学園長 ▼工藤秀機学長 ▼鶴浦裕国際交流センター長・教授 ▼木村学人間学部准教授 ▼金彦叔外国語学部准教授 ▼「新・文明の旅」プログラム派遣生の浦田雅也さん（外国語学部 3 年）、中上咲子さん（同） ▼本学に留学中のウズベキスタン世界言語大学学生のアシュボエフ・シヤフルフさん、サチュラフ・イスロムさん

8 月 31 日に「国際連携教育プログラム開講式」に臨み、本学での学びを深めている 22 名の交換留学生（アメリカ・マレーシア・ブルガリア・トルコ・カザフスタン・ウズベキスタン）は、今後、文京学院大学の経営学部とタシケント情報技術大学、保健医療技術学部とタシケント医学アカデミーの交流を希望し、内容の濃い協議となりました。



笑顔で元気に神輿を担ぐ
留学生

鶴浦教授から神輿の
説明を受ける留学生

本学学生約 50 名と、島田昌和理事長はじめ教職員 6 名が 16 日、向丘追分町会・追分睦のお神輿を担ぎました。

本郷キャンパスにお神輿が入ると、一同さらにパワーアップして盛り上がりました。

農業インターンシップ生 5 名は、朝市での活動を終えた後、神酒所へ出発式の準備や、大人神輿コース 4 力所の休憩地点の準備



本学中庭にお神輿参上！



鶴浦教授から神輿の
説明を受ける留学生

今年度はカザフスタンとウズベキスタンから初の留学生を迎え、さらに国際色が豊かに。留学生から早くも「次の機会も参加したい！」という声が聞かれました。



法被姿で朝市に立つ
農業インターンシップ生

鶴浦裕外国語学部教授より「神道」について学び、16 日、根津宮本町会の協力により元気に神輿を担ぎました。

などに甲斐甲斐しく働きました。

大学 ウズベキスタン共和国大使が来校

本学は 2024 年に学園創立 100 周年を迎えるにあたり、記念事業の一環として 2010 年より 3 年に一度「新・文明の旅」プログラムを実施しています。これは、本学の学生たちがユーラシア大陸の国々を訪れ、現地の大学生と交流を深める中で日本の伝統・文化を発信する力を高めていくプログラムです。

第 3 回を迎えた今年、選抜された 17 名の学生が、ウズベキスタン共和国、カザフスタン共和国を訪れました。それを機に交流が深まり、ウズベキスタン共和国大使が本学を訪問しました。

大学 「根津神社例大祭」学生・留学生・教職員が神輿担ぎ

根津宮本町会

江戸三大祭のひとつとして、300 年以上の歴史がある根津神社例大祭が 9 月 15・16 日に行われました。周辺の 23 町会が神輿を出し、本学の学生・留学生・教職員が 2 町会の神輿を担ぎました。

向丘追分町会

本学学生約 50 名と、島田昌和理事長はじめ教職員 6 名が 16 日、向丘追分町会・追分睦のお神輿を担ぎました。

Green Spirits

変わる学力、変わる教育

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

先に何があるか分からない新しい時代は、だからこそ、刺激に満ちたものでもあります。全生徒がそこで飛躍していけるよう、一層の教育力充実を心がけていきます。ご期待ください。

駒込キャンパスでは、こういった活動を通して更に一つ、各自のリーダーシップを高めていくことを目指します。

この 8 月には、毎年実施される教員研修会の議題としてこの課題を取りあげ、全体で熱い議論を重ねました。その場で再確認されたのが、

中学高等学校で求められる

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

先に何があるか分からない新しい時代は、だからこそ、刺激に満ちたものでもあります。全生徒がそこで飛躍していけるよう、一層の教育力充実を心がけていきます。ご期待ください。

駒込キャンパスでは、こういった活動を通して更に一つ、各自のリーダーシップを高めていくことを目指します。

この 8 月には、毎年実施される教員研修会の議題としてこの課題を取りあげ、全体で熱い議論を重ねました。その場で再確認されたのが、

中学高等学校で求められる

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

先に何があるか分からない新しい時代は、だからこそ、刺激に満ちたものでもあります。全生徒がそこで飛躍していけるよう、一層の教育力充実を心がけていきます。ご期待ください。

駒込キャンパスでは、こういった活動を通して更に一つ、各自のリーダーシップを高めていくことを目指します。

この 8 月には、毎年実施される教員研修会の議題としてこの課題を取りあげ、全体で熱い議論を重ねました。その場で再確認されたのが、

中学高等学校で求められる

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

先に何があるか分からない新しい時代は、だからこそ、刺激に満ちたものでもあります。全生徒がそこで飛躍していけるよう、一層の教育力充実を心がけていきます。ご期待ください。

駒込キャンパスでは、こういった活動を通して更に一つ、各自のリーダーシップを高めていくことを目指します。

この 8 月には、毎年実施される教員研修会の議題としてこの課題を取りあげ、全体で熱い議論を重ねました。その場で再確認されたのが、

中学高等学校で求められる

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

先に何があるか分からない新しい時代は、だからこそ、刺激に満ちたものでもあります。全生徒がそこで飛躍していけるよう、一層の教育力充実を心がけていきます。ご期待ください。

駒込キャンパスでは、こういった活動を通して更に一つ、各自のリーダーシップを高めていくことを目指します。

この 8 月には、毎年実施される教員研修会の議題としてこの課題を取りあげ、全体で熱い議論を重ねました。その場で再確認されたのが、

中学高等学校で求められる

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

先に何があるか分からない新しい時代は、だからこそ、刺激に満ちたものでもあります。全生徒がそこで飛躍していけるよう、一層の教育力充実を心がけていきます。ご期待ください。

駒込キャンパスでは、こういった活動を通して更に一つ、各自のリーダーシップを高めていくことを目指します。

この 8 月には、毎年実施される教員研修会の議題としてこの課題を取りあげ、全体で熱い議論を重ねました。その場で再確認されたのが、

中学高等学校で求められる

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

先に何があるか分からない新しい時代は、だからこそ、刺激に満ちたものでもあります。全生徒がそこで飛躍していけるよう、一層の教育力充実を心がけていきます。ご期待ください。

高等部副教頭

佐藤 泰正



値に依らない学力です。実際に、そのような観点で行われている入学試験も徐々に増えています。

大学入試問題から例を挙げましょう。「あなたがいま試験を受けているキャンパスに関して、気づいたことを一つ選び、それについて 60〜80 語の英語で書きなさい」（2017 年度東京大学より）。ここで問われるのは「非認知力」。誰が見ても同じ評価になる領域が認知力だとすると、感性や創造性、更に行動力といった、数値化できない部分を非認知力と言います。これからの不確実性の高い世界では、この非認知力がこそ求められます。大学入試改革において、学習以外の諸活動も個別に確認していく仕組み（e-ポートフォリオ）が導入されるのには、このような背景がある訳です。これからの学校活動の中では、学力を担保した上での探究活動や発表活動の充実が急務です。

「学力」について、ややもすると知識に偏重しがちだったこれまでの指導内容に対して、新しい時代に対応した資質と能力の育成が求められます。それは、偏差

高校

「グローバルスタディーズセミナー」で学ぶ

本校は、文部科学省より「スーパーグローバルハイスクール（SGH）アソシエイト」の指定を受けています。生徒たちは、校内外の専門家による指導を受けながら、日々の探究活動に動んでいます。

今回は、8月に行われた「グローバルスタディーズセミナー」について、SGH教育センターの杉本邦彦センター長・教諭からの報告を紹介します。

8月20日～23日まで、駒込キャンパスで、高一国際教養コースAクラスの生徒参加による「グローバルスタディーズセミナー」が行われました。

SDGsカードゲーム

今回参加した生徒たちは、SDGsについて総合学習の時間「探究の技法」で探究活動を行っています。これは、国連が採択した「持続可能な発達目標（Sustainable Development Goals）」のこと

で、SDGsについて総合学習の時間「探究の技法」で探究活動を行っています。これは、国連が採択した「持続可能な発達目標（Sustainable Development Goals）」のこと

により効率よく生産する企業の例なども取り上げながら、「食料の6割を輸入に頼る日本の現状についてどうしたらよいのか」の意見交換をしました。日常生活で、自分たちがどの位の水を使っているのか、実際に計算もしました。自分たちの視点で、教育の重要性を訴えるポスターをそれぞれが作成しました。

午後は、グループ毎に外務省、JICA地球ひろば、ユニセフハウスを訪問。今後の探究活動に活かすため、体験学習や情報収集を行いました。

生徒からは次の感想が寄せられました。▼「SDGsは私たちに取組むに」というイメージがありましたが、私たちにできることがあり興味を湧きました」▼「環境対策ばかりを行つと経済は安定せず、経済のことはかりを考えると社会や環境は悪くなるなど、すべてを良くしようとするのはすごく難しいことですが、ゲームの結果を見ると、大変であっても意識すればできることだと思えました。みんなが考えて意識することが大切だと感じました」

英語特別授業

SDGsの視点をもとに、午前中は4名の外国人講師と一緒に、それぞれ「Food（食料）」「Water（水）」「Education（教育）」「Poverty（貧困）」について、画像や動画、クイズやゲーム、ペアワークなどを通じて英語で学びました。例えば、工場での水耕栽培

英語特別授業で難題に挑む

各グループは、手持ちのお金と時間、プロジェクトカード（仕事）を使って、与えられた目標達成に向かいましたが、世界の「経済」環

「SDGsカードゲーム」で積極的に行動

境「社会」の指標が変動。前半の終わりに「経済」が圧倒的に伸びているが「環境」や「社会」の指標は壊滅的な世界」となっていました。中間報告で現状の課題が見えてくると、後半の活動では、他のグループと交渉してお金や時間、カードを交換しながらプロジェクトを動かそうという行動が活発になりました。最終的には、環境や社会の指標も回復させることができ、まさに国際社会の縮図といえるカードゲームの取り組みとなりました。

SDGsの視点をもとに、午前中は4名の外国人講師と一緒に、それぞれ「Food（食料）」「Water（水）」「Education（教育）」「Poverty（貧困）」について、画像や動画、クイズやゲーム、ペアワークなどを通じて英語で学びました。例えば、工場での水耕栽培

により効率よく生産する企業の例なども取り上げながら、「食料の6割を輸入に頼る日本の現状についてどうしたらよいのか」の意見交換をしました。日常生活で、自分たちがどの位の水を使っているのか、実際に計算もしました。自分たちの視点で、教育の重要性を訴えるポスターをそれぞれが作成しました。

大学

「森のようちえん」で学生が環境教育

8月27・28日、育施設です。

環境教育研究センター所属の学生6名が、長野県安曇野市の森のようちえん「響育の山里くじら雲（依田敬子園長）」を訪問しました。

同園は、同市明科の押野山中腹の古い養蚕農家を拠点に、2006年度より活動する全国的に著名な幼児教育施設です。そのために用いるのは「森のドア」。落ち葉のある地面に置いた小さなドアの裏側に、園児が学生のサポートを受けながら好きなものを釘打ちし、時間の経過と共にそれらがどのように変化していくかを観察。土に還るものを食べた虫の種類や、土に還らないものは何かなどを学ぶ方法です。

活動の始めに、学生たちは「森のドアのパネルシアター」を披露。続いて、園児と共に森のドア制作「森のドアのスケッチ」森のドアを置く場所の選定と設置を行いました。一週間後、各々が「いただきます」を



「パネルシアター」を披露する学生たち



「逢瀬の魅力発掘プロジェクト」のワークショップ



ふじみ野高校生と共に「都市・農村交流活性化案」ワークショップ

思います」

★中井佳輔「このツアーとは別に、ゴールデンウィークに逢瀬町を訪問しました。東京で生活していると、福島県風評被害を目の当たりにすることはないので、初めて逢瀬町に行きまして皆さんと触れ合った時、風評被害の大変さを実感しました。今回のツアーでは、辛い状況に置かれている中で、皆さんが僕たちを心から歓迎してくださり、こちらが元気をもらえるようでした。後輩にも『まずは元気をもらいに行ってください』と伝えたいと思います」

★荻野響「少し変わったことをやりたいと福島に足を運んで調査を続け、皆さんと触れ合う中で喜びややりがいを感じています。4年生は郡山市の産直の風評被害を払拭するための活動をしてきました。今では原発による放射能の値も基準値内に収まり、安全面では大丈夫なのですが、そのことが全国的に広まっていないため、それをどのように発信していくかが課題です。3年生と全く同じ活動ではありませんが、クロスする部分があるので、良い形で連携できればと思います」

現地でこの活動をサポートした中瀬さんは、次のようにコメントを寄せてくれました。

「4月より、中山ゼミの3年生、4年生から逢瀬町の活性化プロジェクトの相談を受けていました。インタビュー、アンケート、ワークショップを通じて逢瀬町の新たな魅力や、商品の開発、町のブランディングをしたいというものでした。実際に逢瀬町に来て活動をするためにツアーをしたいと持ちかけてくれました。」

3年生はワークショップで、SNSを用いて2日間の体験で感じた『逢瀬町の魅力や商品になりうることを』探ってくれました。

4年生は逢瀬町の農家に対してインタビューを、参加した人々にはアンケート調査を行いました。逢瀬町のためにと学生たちが働いてくれたので、僕を含め逢瀬町の農家の方のモチベーションが上がりました。文京学院大学の学生とのこれまでの活動を基盤に、これからも共に良い共生社会のために活動していきたいと思っています」

大学

「福島と都市を結ぶツアー」学生が実施

コミュニケーション社会学科・中山智晴ゼミナールの学生たちが、東日本大震災時の原発事故により、未だに風評被害を受けている福島の農村再生プロジェクトに取り組んでいます。

その一環で、3・4年生が中心となり、ふじみ野高校と共に「福島県郡山市逢瀬町 都市―農村交流活性化プロジェクトツアー」を8月30・31日に行いました。活動にあたり、学生たちは同学科2016年度卒業生で、逢瀬町に移住した中瀬亮兵さんに企画の相談をして、打ち合わせを重ねました。同ツアーの内容は次の通りです。

【1日目：「逢瀬の魅力発掘プロジェクト」ワークショップ】

★主題＝第1回「高校生・大学生の考えるなんだべ村自然体験メニューの検討」（なんだべ村にて）

★内容＝里山の風景を残すなんだべ村の自然、郷土料理、農家の人たちの魅力を体験後、ツアー企画者がなんだべ村ならではの新たな体験メニューを提案。

★主題＝第2回「逢瀬町の魅力を活用した生産地―消費地の交流活性化について」（逢瀬荘にて）

★内容＝逢瀬町の魅力（名所、名物、人物など）をグループごとに洗い出し、各自が撮影した動画や静止画の紹介を含め、都市部の若者が訪れたくなる逢瀬町PR企画を発表。

【2日目：調査・見学】

★主題＝農作物直売所「ポケットファームおおせ」の活性化調査・見学

★内容＝▼大学生：「ポケットファームおおせ」活性化第1回調査結果を踏まえた聞き取り調査の実施。▼高校生：「ポケットファームおおせ」の見学、直売所の店舗や商品の飾り付けなどに対する改善提案。

同ツアーを企画・運営した4年生の4名は、次のように想いを深めています。

★辻竜之介「高校生が沢山参加する中で、自分たちが過ごしたこの数年が、高校生とどの位違うのかを実感できました。ツアーの訪問先では高齢者が多く、若い世代と話し慣れない中で、一生懸命コミュニケーションを取ってくださる姿が印象的でした。先入観を持って活動すると、大切なことを見落とすこともあるのももったいないと後輩に伝えたいと思います」

★稲山翔洋「このツアーで、地元の農家の皆さんにインタビューして、産直の売り上げを伸ばす方法を模索しています。ただ、自分たちの代では時間が足りないため、前段階としてインタビュー調査により問題提起をして、次の代に引き継ぎたいと思います。前回のツアーでは農泊したのですが、農家の方々の相談に乗ったり、反対に相談したり、とても温かくて深い交流ができました。後輩には計画性をもって活動に積極的に参加してほしいと

た野菜と、まだかぶりつく虫たちを見つけたことでしょ。子どもたちの驚きや喜びを目の当たりにした川島さんと園長さんは、次のように想いを語りました。

★川島「自然が身近な環境の中で、子どもたちが生活に必要不可欠な自然に学んでいる姿がとても新鮮でした。こちらのベイスに巻き込むのではなく、子どもに寄り添うことの大切さを学びました。子どもたちが縦割りして生活していて、年長児が年少児の世話をしつかりとしていることがすごいと思いました。昼食時、自分で食べる場所を決めて、各々が『いただきます』を

して食べる姿に驚きました。こういう保育も良いと思います」

★園長「花の名前を覚えてくれたり、森のドア作成時に積極的に釘打ちの場所を考える姿を見て、自然の中で過している子どもたちは違っていると思いました。自分のやりたいことを自分の考えでやるという園の方針で、しっかりと子どもに育っていると感じました。こういう環境で育っている子どもには、その子が興味を持っている話題で話しかけたり、わからないことをこちらから聞くことで良い関係が築けると感じました」